

2018年1月7日 主日礼拝 礼拝説教（要旨）

聖書 ローマ 1：1～7

説教「福音のために召されて」

日本キリスト教会鶴見教会 牧師 高松牧人

ローマの信徒への手紙は、パウロがまだ行ったことのないローマの教会とそこにいるまだ会ったこともない信徒たちに向けて書き送ったものです。パウロは、近い将来ぜひローマに行きたいと願っていました。彼の壮大な宣教ビジョンによれば、ローマに行った後、そこを拠点に、彼らの支援を得てはるか西方のイスパニアにまで行きたいと願っていたのです。そこでパウロは、彼らのよき理解を得るために、自分が信じ、宣べ伝えている福音の筋道を丁寧に書き綴ったのです。

手紙の書き出しの1章1節には、「パウロから」とあり、そこに「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となった」という修飾語がついています。これは差出人パウロの自己紹介ですが、これらの簡潔な言葉にも、神の恵みが証しされています。

パウロは自分のことをまず「キリスト・イエスの僕」と言います。「神の僕」という言い方は、旧約聖書では神に仕える光栄ある称号でした。モーセやヨシュア、またダビデは神の僕と呼ばれていますし、預言者たちも「主の僕」について語りました。「僕」とは奴隷という言葉です。したがって、ギリシア・ローマ世界では決して好ましい言い方ではありませんでした。けれども、そのことを承知の上で、パウロはイスラエルの伝統に従い、私は「キリスト・イエスの僕」とであると言うのです。ここには、イエス・キリストこそが私の唯一の主人であり、奴隷が主人に対してそうであるように、私はこのお方に所属し、このお方に忠誠を尽くすのだという思いがあります。

パウロが自分のことをキリスト・イエスの奴隷というとき、卑屈な思いや悲壮感があつたわけではありません。奴隷制社会では奴隷は全く主人の所有物でしたが、奴隷はだんだん主人の信用を得ると、財産の管理を任されたり、子どもの世話や教育をゆだねられたり、主人を代表するような場合もありました。パウロがキリストの奴隷という言葉を使うときも、そこではキリストを代表し、キリストから全権をゆだねられているのだという喜びと誇りがありました。

「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」（14章8節）。これは、キリスト・イエスの僕とされたパウロの思いを最もよく伝えている御言葉でしょう。

次に、パウロは自分のことを「召されて使徒となった」と言います。「使徒」とは遣わされた者という意味の言葉ですが、彼にはあの12弟子のように主イエスと寝食を共にし、エルサレムへの道を歩いた経験はありません。また、彼は最初のうち、キリスト者となった人たちを激しく迫害していましたから、その意味では「使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打のない者」（コリント 一 15章9節）でした。けれども、彼は確かに復活の主の御声に打ち倒され、復活の主から福音宣教を委託

されたのでした。それは彼の心変わりではなく、突然の、思いがけない、圧倒的な神からの召しによることでした。それゆえ、パウロは使徒としての強い自覚をもっていました。ダマスコ途上の回心については、パウロ自身は沈黙していますが、自分の思いを超えた驚くべき神の一方的な招きがあったことは、次のような彼の言葉からも伺えます。「しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようになされた・・・」(ガラテヤ 1 章 15 節)。

さらにパウロは「神の福音のために選び出され」という言葉をつけています。「選ばれる」とは、「選び分けられる」とか「別たれる」という強い言葉です。この言葉はパウロにとって感慨深いものがあったのではないかと思われます。というのは、彼がかつて属していたユダヤ教のファリサイ派というのは、およそ汚れたものや律法に従わない人々から自分を分離するというグループだったからです。けれども、そのようにして神にひたすら仕えようとする生き方が、神の愛を拒絶し、主イエスを十字架へ追いやっていたのでした。そうした人間的な熱心さとは全く違う仕方で、神はパウロを福音の宣教、すなわち神がイエス・キリストによって成し遂げてくださった驚くべき御業を全世界に宣べ伝えるために、引き出し、選び分けくださったのでした。

パウロがこの手紙を書いたのは、回心して 20 年くらいたった頃、第 3 伝道旅行の途中にコリントに滞在した時だったと言われています。異邦人教会の指導者として一番油が乗っていた頃かもしれません。しかし同時に、諸教会のあれこれの心配事を抱え、戦いと悩みに明け暮れしていました。パウロはまた、伝道の生涯において、自らのもつ病に悩まされることも少なくなかったようです。さらに、コリントではパウロのことを批判する人たちが、彼は「手紙は重々しくいが力強いが、実際会ってみると弱々しい人で話もつまらない」(コリント 二 10 章 10 節) などと言っていたようです。どんなにくやしく、もどかしい思いをしたことでしょうか。けれども、彼は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」との御声を聞き、「わたしは弱いときにこそ強いからです」(同 12 章 9～10 節) と言うことができたのです。

神が生きて働いておられる。神が私を召し出し、お用いくださっている。そのことをパウロは自己紹介にあたって深くかみしめずにおれなかったに違いありません。私たちも同じく召されてイエス・キリストの僕とされ、キリストに属する者として生かされています。その恵みと光栄にあずかっていたいと思います。